

平成 21 年 5 月 27 日現在

研究種目：基盤研究（B）

研究期間：2005～2008

課題番号：17402007

研究課題名（和文）ペルー・ベラスコ軍事政権の軍内政治の力学

研究課題名（英文）Political Dynamics within the Armed Forces under the Velasco Military Government in Peru

研究代表者

大串 和雄（OHGUSHI KAZUO）

東京大学・大学院法学政治学研究科・教授

研究者番号：90211101

研究成果の概要：

「ペルー革命」と呼ばれたペルーの軍事政権（1968年10月～1980年7月）について、1968年10月から1975年10月までの閣議録下書きを精査することによって、軍内政治のあり方、政権の内部事情、各閣僚の志向、当時のペルーの状況などについて、多くの情報を得ることができた。また、軍事政権第二期（1975年8月～1980年7月）の統治綱領であるトゥパック・アマル計画の第一次草稿を後の確定版と比較することによって、政府の志向がどのように変化したかを確認することができた。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2005年度	600,000	0	600,000
2006年度	1,300,000	0	1,300,000
2007年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2008年度	1,100,000	330,000	1,430,000
総計	4,100,000	660,000	4,760,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：政治学・政治学

キーワード：政治学、比較政治、ラテンアメリカ、ペルー、ベラスコ、軍事政権

## 1. 研究開始当初の背景

ペルーは1968年10月から1980年7月まで、「ペルー革命」を標榜する軍事政権に支配された。第一期（1968年10月～1975年8月）の大統領はホワン・ベラスコ＝アルバラード将軍、第二期（1975年8月～1980年7月）の大統領はフランシスコ・モラレス＝ベルムデス将軍である。

この軍事政権は、1975、76年頃まで左翼的性格が強く、外国企業の国有化、農地改革、労働者の企業経営参加、自主管理部門の創設など、多くの急進的かつ非常に斬新な改革を

行ない、世界からも注目された。しかしベラスコの失脚後まもなくして「革命」の後退が始まり、1976年7月に急進派将官のほとんどが軍内から一掃されたことにより、軍事政権の保守化が決定的となった。

この軍事政権の内部にさまざまな潮流が存在することは、軍事政権中から指摘されており、それらの潮流のせめぎ合いについていくつか研究が出版されてきた。筆者は、それらの先行研究を手がかりとしながら、ペルーの軍事政権の軍内政治の力学について、1968年10月～1976年7月を対象として研究し、

1989年に博士論文として提出した。この研究は後に修正を加えて、『軍と革命 ペルー軍事政権の研究』（東京大学出版会、1993年）として刊行された。

しかし、ペルーでは公文書を適切に保存・管理することが行われておらず、筆者は若干の資料を除いて、ほとんど公文書に依拠することができなかった。そこで筆者は、1968～76年の全閣僚の半数を含む、約100人の軍人・文民との約200回のインタビューによって、軍内政治の実態に迫ろうとした。その結果、先行研究に比べればはるかに正確で内容の豊かな研究になったと自負するものの、公文書を利用できないことによる限界は明らかであった。

とりわけ、最も重要と考えられる閣議録が公開されていないことは研究にとって痛手であった。噂では陸軍が閣議録を厳重に保管しているということであり、ある退役陸軍将官も筆者にその旨を述べた。ペルーでは文書を保存して公開する伝統が乏しく（筆者の知る限り、今日までペルー政治史のどの時期に関しても、閣議録を用いた研究は存在しない）、また特に軍は秘密志向が強いので、今後も公開される可能性にはあまり期待できない。このように文書による証拠に支えられていない点が、筆者の（そして他のすべての研究者の）研究の本質的欠陥であり、筆者がすでに公刊した研究においても、仮説にとどまる部分が多かったのである。

しかし筆者は近年、閣議録の下書きが元政権関係者の家族によってペルーのカトリカ大学の図書館に寄贈されたらしいことを突き止め、2004年7月にペルーを訪れた折にアプローチを試みた。大学側は当該資料を一般公開していなかったが、筆者は副学長から特別閲覧許可を得て資料を閲覧した。その結果、この資料が期待以上に重要なものであることが判明した。そこには単に閣議の決定だけでなく、個々の閣僚の発言内容が記録されており、各閣僚の個人的立場、決定の真の理由、政府内部の考え方や関心事などが生き生きと伝わってくる。まさに第一級の史料であった。

この史料を読みこなし、「ペルー革命」の実相にさらに迫りたいというのが、筆者がこの研究を行なうことにした動機である。また、この史料からどれだけのことが読みとれるかは、読む人の知識にかかっている。当時の各閣僚の立場や様々な争点を熟知している者でなければ、読み過ぎてしまう部分が多いであろう。すでにこのテーマを深く研究したことがある筆者は、この史料を最も有効に活用しうる立場にあった。この第一級の史料を無駄に埋もれさせず、学界のために活かしたいということも、筆者がこの研究を行なう動機であった。

## 2. 研究の目的

本研究は、「ペルー革命」における軍内の政治力学を明らかにしようとするものであった。閣議録の下書きを精査することにより、これまで軍事政権のブラックボックスであった部分に光を当て、ペルーの軍事政権に関する理解を深めることを目的とした。ただし、閣議録下書きは1975年10月で終わっているため、調査対象期間も1968年10月から1975年10月までとした。

また筆者の研究は、軍の政治行動に関する理論的研究を意識し、それに貢献することも目指していた。ペルーのベラスコ政権は、その急進的かつ壮大な社会実験によって世界の注目を集めたが、ベラスコが軍内クーデターで失脚した後、軍事政権は政策を大きく転換した。ベラスコ政権はその特異な性格と、軍内対立が重要な役割を果たしたという2つの点において、比較研究にとってもきわめて重要な事例と言える。

## 3. 研究の方法

(1) 平成17年度は準備期間と位置づけ、海外調査は行わず、日本で準備作業を行なった。すなわち、筆者の前著刊行時（1993年）以降に刊行されたものを中心に公刊文献を検討した。この作業は平成18年度以降も海外調査と並行して進められた。

検討した文献は以下の5種類に分けられる。

軍事政権の当事者、あるいは何らかの形で軍事政権と公的・私的に関係があった者によるメモワール、インタビュー、その他の著作。

ベラスコ政権の軍内政治やイデオロギーなど、政権全体に関する研究。

ベラスコ政権のさまざまな政策分野や特定の側面を明らかにするモノグラフ。政権と企業家との関係、農民運動、農地改革など、軍内政治の文脈を構成し、また軍内抗争の要因ともなったさまざまな側面の研究がある程度進展しており、参考にすることができた。

米 국무省の外交文書。外交文書集 *Foreign Relations of the United States* の刊行が、ベラスコ政権の初期をカバーするところまで進んでいる。

他国の軍事政権の事例研究および軍の政治行動に関する理論的研究。

(2) 平成18年度から20年度の3年間、毎年7月から8月にかけてペルーに赴き、閣議録下書きおよびその付随史料を閲覧した。複写や写真撮影は許可されなかったため、手書きでメモを取らざるを得なかった。並行して、ペルー滞在中に、公刊資料の収集、現地研究者との意見交換等を行なった。

#### 4. 研究成果

##### (1) 閣議録下書きの性格

カトリカ大学に寄贈されている閣議録下書きについてはまず第一に、閣議の内容を網羅しているわけではないということがわかった。軍事政権中は閣議が立法権を兼ねていたため、多くの法案が閣議で承認されたが、法案承認プロセスにおける議論はほとんど下書きに残っていない。また、他の資料によって、ある日の閣議である事柄が扱われたことがほぼ確実な場合でも、その事柄について閣議録下書きで触れられていないことがあった。

しかし第二に、この閣議録下書きは単なるメモではない。閣議録の作成は、法律将校である Arturo Valdés Palacio 陸軍大佐（後に少将）が、閣議書記としてこれを担当していた。カトリカ大学に寄贈された閣議録下書きのほとんどは Valdés によって作成されたものだが、日によって同じく法律将校の José B. de Rivera Lucero 空軍大佐（後に少将）が作成したものもあった。しかし下書きと一緒に、彼ら以外の者によるメモも一部残されていた。そのメモは、閣議録下書きの内容と重複していた。このことから、閣議では書記以外にもメモを取る係があり、書記はそれらのメモを踏まえて正式の閣議録として残すバージョンを作成していたことが窺える。カトリカ大学に寄贈されているのは、そのようにして作成された、閣議録として清書する直前のバージョンだと推察される。

##### (2) 全体的に得られた知見

毎回の閣議の冒頭で前回の閣議録が朗読され、時に閣僚から修正の要求が出されていた。修正要求の発言は閣議録下書きに記載されている。

ベラスコ大統領は強いリーダーシップの持ち主として知られているが、ベラスコが主宰する閣議は思いの外オープンで、ベラスコが自由な討議を促し、それに呼応してかなり率直な意見交換が行なわれていた。決定で決を採ることも多く、ベラスコが支持する案が多数決で敗れることもあった。

少なくとも閣議録下書きに記載されている事柄から判断する限り、閣議の多くの時間が、経済状況の報告や国家が当事者となる契約の詳しい説明に費やされていた。

閣議録の議論からは、軍内の派閥対立が明確に浮かび上がってこなかった。意見の対立や応酬はかなりあるものの、派閥間の多かれ少なかれ一貫した対立という姿ではなかった。

一般に、文民政権と同様に、軍事政権は

世論の反応を気にしながら行動を決定していた。

全般的に、閣議での発言には、反対派に対する非寛容な態度が強く出ていた。軍事政権は当初から、軍や政府を分裂させようとするキャンペーンが行なわれていると認識しており、そのことが批判的報道に対して強硬な措置をとる一つの理由となっていた。

政府系労働組合の組織化などにおいて、政府のやり方は秘密工作に頼るきわめてマニピュレーションの性格が強いものであった。この性格は、従来、「ラ・ミシオン」と呼ばれる派閥の特徴として挙げられることがあったが、このような組織化の段取りは閣議で説明され、了承されており、違和感が表明された形跡はない。すなわち、秘密工作による組織化は軍人に広く共有された志向だったと考えられる。

閣僚は全員が将官であったが、発言内容からは、自分が担当しているセクターについてよく情報を把握していることが窺われた。

##### (3) 具体的に明らかになった点は数多いが、以下ではそのうちのいくつかを記すにとどめる。

軍事政権第一期（ベラスコ政権）の統治綱領インカ計画は、1974年7月に公表されたが、当初からその計画が存在していたことを疑う者も多かった。筆者は政権当事者へのインタビューを通じて、当初から何らかの統治綱領が存在したこと、しかし当初存在した計画と後に公表された計画とは内容が同じではなく、1974年に公表されたのは当初の計画の改訂版であることを明らかにしていた。この点に関して、軍政が発足した1968年10月3日の閣議においては、ベラスコが以下のように発言しており、計画の存在が裏付けられた。「革命政府の全体[統治]計画は現在改訂中であり、[その作業が]終わったら閣議の承認にかける。それまでは各大臣は規約(Estatuto)に記された一般的目標に従って行動してほしい(後略)」。統治計画は10月21日に閣僚に送付された。なお、資料の中には、1968年10月3日付けの統治綱領も存在する。この統治綱領には、「統合司令部議長兼陸軍総司令官ホワン・ベラスコ=アルバラード」という印と、「統合司令部議長」という印が押してある。これらの官職は、10月3日のクーデター時点でのベラスコの肩書きである。しかし統治綱領の内容は非常に細かい語句の違いを除いて1974年7月に公表されたものと同じであるため、後か

ら作成されたものと推測される。閣議録下書きとともにトゥパック・アマール計画のオリジナル版と、それを作成するプロセスで作成されたさまざまな文書が残されており、これによってトゥパック・アマール計画の作成過程と内容が明確になった。トゥパック・アマール計画は1975～1980年の軍事政権第二期（モラレス＝ベルムーデス政権）の統治綱領として、モラレス政権発足直後に作成が開始された。すでに筆者による過去の研究で、このトゥパック・アマール計画の最初のバージョンは Arturo Valdés Palacio 少将が中心となって起草したが、内容が急進的すぎたために廃案になったことがわかってきた。その後、新たに設置された起草委員会が作成した案が1977年2月にパブリック・コメントのために公表され、若干の改訂を経て1977年10月に採択された。カトリカ大学に寄贈された資料からは、トゥパック・アマール計画の作成過程がかなり大がかりだったことがわかった。トゥパック・アマール計画はインカ計画を改訂する形で行なわれたが、まずインカ計画の各項目ごとに項目別の起草チームが結成された。すべての項目別起草チームには、トゥパック・アマール計画起草のため国家企画院に配置換えされた Arturo Valdés Palacio 少将、Otoniel Velasco Fernández 国家企画院次官、Gustavo Gonzales Prieto 国家企画院職員が入り、それ以外に項目によって1～5名のメンバーが入っていた。それらのメンバーのほとんどは文民であり、おそらく国家企画院の職員であった。これらの起草チームは、1975年10月、管轄省庁に対して、現状、インカ計画の目標の達成状況、今後取るべき方策の提案の3点を送るよう要請した。そして各省庁から送られてきた情報を基にして、起草チームが項目別の計画を作成していった。カトリカ大学に寄贈されたトゥパック・アマール計画のオリジナル・バージョンを1977年2月に公開された原案、1977年10月に採択された確定版と比較することによって、両者の相違点を明確にすることができた。Ernesto Montagne Sánchez 首相兼陸相はクワホネ銅山に関する米多国籍企業との契約に非常に熱心で、契約を推進する発言を繰り返し行なっていた。クワホネ銅山問題とは異なり、同時期に行なわれたITTとの電話会社国有化交渉については、閣議録下書きから判断する限り、ほとんど異論が出なかった。筆者の以前の研究では、電話会社の国有化には安全保障上の理由もあったと考えられていたが、佐官級将校で構成される電話

会社国有化問題検討委員会の報告においては、安全保障上の理由はまったく言及されていなかった。

遅くとも1972年6月の時点で、銀行と保険業の国有化がインカ計画に含まれていた（結局、銀行の一部国有化しか実現しなかった）。

ベラスコは食糧問題に敏感であり、食品の価格を抑えること、サイロを整備して食糧の供給を改善すること、可耕地の住宅地転用を制限することなどに気を遣っていた。

国外追放、訴追、訴追の停止、減刑、アブラ党の集会を許可するかどうかなど、弾圧に関わる事柄は、内務省の独断ではなく、閣議における議論を経て（しばしば多数決で）決定されていた。

一般的に、かなり細かいことまで閣議に上っていた。

税査察を弾圧の道具として用いていた。国家企画院が発行する開発計画は閣議での修正を経て作成されていた。

閣議録下書きで見ると、経済相時代のモラレス＝ベルムーデスの発言は自分のセクターのことにほぼ限られていた。

1973年6月の時点ですでに内務大臣から革命政府の政党を組織することが提案されていた。

1974年7月にGuillermo Marcó del Pont 経済相が健康上の理由で突如辞任したことについて、これまで失政の責任を取らされた、あるいは閣内の対立によるという解釈があったが、1974年7月17日の閣議においてベラスコは、7月12日にMarcó del Pontが入院し、現在は面会謝絶であること、および健康上の理由で経済相の辞表を提出したことを説明している。

ベラスコ政権末期、革命労働運動（MLR）が議論を巻き起こした。MLRは政府支持を表明していたが、同じく政府を支持する左派系労組の指導部を暴力的に排除していた。MLRに対するベラスコの態度は、MLRの活動を容認した1975年1月29日の記者会見における発言を除いて知られていなかった。しかしベラスコは、閣議においてもMLRに寛容な態度を示していた。他方で、左派がMLRとのつながりを指摘していたアブラ党に対しては、ベラスコは最後まで強硬であった。ベラスコの妻はアブラ党の家庭の出身であったが、この点ではその影響はなかったように思われる。

- (4) 得られた成果の国内外における位置づけとインパクト  
ペルーの軍事政権の軍内政治プロセスに

については、筆者がかつて著した研究を超えるものは公刊されていないが、今回の調査によってさらに軍事政権の実像に迫ることができた。

ただし、まだその成果を公表していないので、インパクトは現時点では存在しない。

#### (5) 今後の展望

当初の計画では、今回の調査で明らかになった点を踏まえて前著を改訂し、スペイン語で刊行するつもりであった。しかし、さらに米国の外交文書を調査すべきであると思い当たった。米務省の文書の公開が1974年（電報は1975年）まで進んできたからである。言論の自由が制限されていたペルーにおいて、駐ペルー米国大使館が送る情報は貴重な資料である。また、米国大使館員は政府内外の人びととしばしば会談し、その内容を報告書に残している。また大使館は、労働情勢、経済情勢、軍事情勢等についても報告を本国に送っている。米国のペルーに対する政策意図を明らかにする資料が含まれることは言うまでもない。

そこで筆者は、平成21年4月20日から5月10日にかけて、米国メリーランド州カレッジ・パークの国立公文書館で外交文書の調査を実施した。また、一部の文書については、情報公開法(Freedom of Information Act)に基づく開示請求を行なった。今後、米国から持ち帰った複写資料および情報公開法で秘密指定解除される資料を精査し、その内容も取り入れてから前著の改訂版をスペイン語で刊行する計画である。

#### 5. 主な発表論文等 該当無し

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

大串 和雄 (OHGUSHI KAZUO)

東京大学・大学院法学政治学研究科・教授  
研究者番号：90211101

##### (2) 研究分担者

なし

##### (3) 連携研究者

なし